江馬氏城館跡 関連年表

西暦	元号	ことがら
13世紀ごろ		江馬氏が高原郷に入ったとされる。
1342	康永1	「江馬左近将監忠継」天龍寺造営の儀礼の際に小侍所の武士として佐々木佐渡判官入道（京極高氏（導誉））の馬を引いた。
1372	応安5	「江馬但馬四郎」広瀬氏を通じ、管領細川頼之から、山科家領を押領した守護被官人・垣見氏を排除するよう命令を受ける。
1381	永徳1	「江馬但馬四郎」稲葉氏を通じ、管領細川頼之から、山科家領を押領した守護被官人・垣見氏を排除するよう命令を受ける。
1383	永徳3	「江馬能登三郎」守護被官人の垣見氏とともに山科家領飛騨国江名子・松橋を押領する。守護京極氏に排除するよう命令が出される。
1388	嘉慶2	「江馬民部少輔」室町幕府奉行人より山科家領段銭催促を停止するよう命令を受ける。
1471	文明3	「江馬左馬助」室町幕府奉行人より山科家領飛騨国岡本上下保・石浦・江名子・松橋を、姉小路氏とともに現地で治めるよう命令を受ける。
1472	文明4	「江馬左馬助」管領細川勝元に対し、幕府に忠節を尽くすと書状を出す。
1484	文明16	「江馬三郎左衛門元経」小八賀郷の代官に任命される。
1489	長享3	禅僧 万里集九、高原郷・荒木郷を訪れ、江馬氏の饗応を受ける。
1491	延徳3	「江間殿」室町幕府奉行人から北野社領飛騨国荒木郷の回復を命じられる。以後、江馬氏が北野社領の飛騨国荒木郷の所領経営を委任される。
1492	延徳4	「和尓平太」江馬氏の使いとして、北野社に年貢を南門院に納める旨の返答を行う。
1544	天文13	飛騨国に兵乱がおこり安国寺・千光寺が被害を受ける。
1564	永禄7	江馬輝盛と江馬時盛が対立。輝盛は三木良頼とともに上杉氏の助力を、時盛は武田氏の助力を得る。最終的に時盛が和睦に応じる。
1582	天正10	江馬輝盛、三木自綱と荒木郷八日町で合戦に及ぶ。 輝盛が討ち死し江馬氏敗走（「八日町合戦」）。 直後に三木方の小島時光が高原諏訪城に攻め入り落城。
1584	天正12	江馬時政、河上用助に荒木郷の土地を給付する。
1585	天正13	豊臣秀吉の命を受けた金森長近・可重父子が飛騨に侵攻。 江馬時政は当初金森氏に付き従うが、金森氏が飛騨統一直後に一揆を起こし滅ぼされたと伝わる。

お城用語

曲輪（くるわ）…「郭」とも書く。山を削平して作られた平坦地。中心的な大きな曲輪は「主郭（しゅかく）」と呼ばれる。

切岸（きりぎし）…山を切って作られた人工の急斜面。

堀切（ほりきり）…尾根筋を掘り切って切断した空堀（からぼり）(水のない堀)。尾根筋からの敵の侵入に備えた防御施設。

横堀（よこぼり）…曲輪を囲い込む横方向の線的な空堀。戦国期後半に発達する。

竪堀（たてぼり）…山の斜面に沿って縦に掘られた空堀。敵の斜面移動を封鎖する。

土塁（どるい）…曲輪の縁辺部などに作られた土盛りの防御壁。

土橋（どばし）…土で築いた橋。

虎口（こぐち）…城の出入り口のこと。戦国期後半になると、門の前面や内面に土塁を構えて直進させずに折れさせて移動させる「枡形虎口（ますがたこぐち）」が出現する。

算木積（さんぎづ）み…石垣の隅の積み方。石の長辺と短辺を交互に重ね合わせることで強度を増している。本格的に城郭に用いられるのは織田信長の安土城以降とされている。

本城（ほんじょう）…領主が本拠とした城。

支城（しじょう）…本城を守るように配置された補助的な役割の城。枝城（えだじろ）ともいう。

山城を見学される皆様へ

各山城は、多くは個人の方が所有する山です。山での火の使用はおやめください。
土塁や堀は崩れやすいので、遺構の保護のためにも気をつけて見学してください。
ゴミは各自で持ち帰るなどして、大切な文化財の保全にご協力ください。
登山道が整備されていない山城もありますので、見学の際は十分気を付けて登山してください。
倒木や崩落等で通行できない場合は、無理をせず引き返してください。

お問い合わせ
飛騨市教育委員会事務局 文化振興課
〒509-4292 岐阜県飛騨市古川町本町２番22号
TEL：0577-73-7496　FAX：0577-73-7497　Email：bunkashinkou@city.hida.gifu.jp
（平成30年○月第1刷発行）

飛騨市の文化財 HP
http://hida-bunka.jp

飛騨市山城マップ



江馬編

北飛騨の雄・江馬氏の山城

江馬氏は、中世に北飛騨の高原郷（現在の飛騨市神岡町、高山市上宝町周辺）を拠点に勢力を誇っていた地方領主です。14 世紀頃から室町幕府の文書に度々登場し、飛騨における有力武将であったことが分かります。また、延徳元年（1489）、禅僧の万里集九が高原郷を立ち寄った際、江馬氏の手厚い饗応を受けたという記録があるように、文化的なたしなみも持ちあわせていました。

戦国時代に入ると、飛騨南部より進出し、国司・姉小路氏の名跡を継いだ三木氏と競うようになります。天正 10 年（1582）、江馬氏の当主・輝盛は、姉小路（三木）自綱と飛騨の支配権をめぐり決戦に臨み、荒城郷八日町（現在の高山市国府町）で激突します（「八日町合戦」）。ところが、輝盛は敗れて討死し、直後に高原郷に攻め入った三木方の軍勢によって本城の高原諏訪城も落城します。こうして北飛騨の雄として名をはせた江馬氏は、領主としての姿を失うこととなります。

江馬氏の城館は、平地の拠点である下館と、各地域に造られた山城で構成されています。下館は発掘調査によって格式の高い庭園を持つ武家館であることが分かりました。庭園やそれを眺める会所建物・主門・土塀等の復元整備を実施し、庭園区画が国の名勝に指定されています。

山城も大変魅力的です。その理由の一つは、良好に城郭遺構が残っていることです。例えば、本城の高原諏訪城や、領内を見渡す重要拠点であった傘松城には、地形をダイナミックに加工した、急峻な切岸や巨大な堀切・竪堀などを今でも現地で見ることができます。石垣を多用した城とはまた一味違った飛騨独自の「土造りの城」の魅力を存分に体感できます。

もう一つの魅力は、それぞれの城から、他の山城の他に、越中街道・信州街道といった主要な街道や峠を見渡すことが出来ることです。江馬氏は、効率的に領内を治めるため、高原諏訪城に加え、主要な河川や街道沿いに支城を築いています。外敵への防御対策や領内の見通しを重視していたのでしょう。このように領域統治のために配置された城館のうち下館・高原諏訪城・土城・寺林城・政元城・洞城・石神城は**「群として機能していた中世城館の形態を示す貴重な遺跡」**として、国史跡に指定されています。その他にも、傘松城や東町城といった江馬氏を語るうえで欠かせない魅力的な城も存在します。

これらの山城を巡ることで、江馬氏の領域支配の工夫を体感することができるでしょう。

※ 1 ～ 7 の山城を詳しく紹介します。

その他の城跡

a. 江馬氏下館跡
b. 八幡山城跡
c. 土城跡 (国史跡)
d. 岩ヶ平城跡
e. 奥政元城跡
f. 下山田城跡
g. 野中城跡

※土城跡は危険なため、見学はご遠慮ください。

神岡町周辺の城跡位置図の城跡マップ



1. 高原諏訪城跡（国史跡）たかはらすわじょうあと

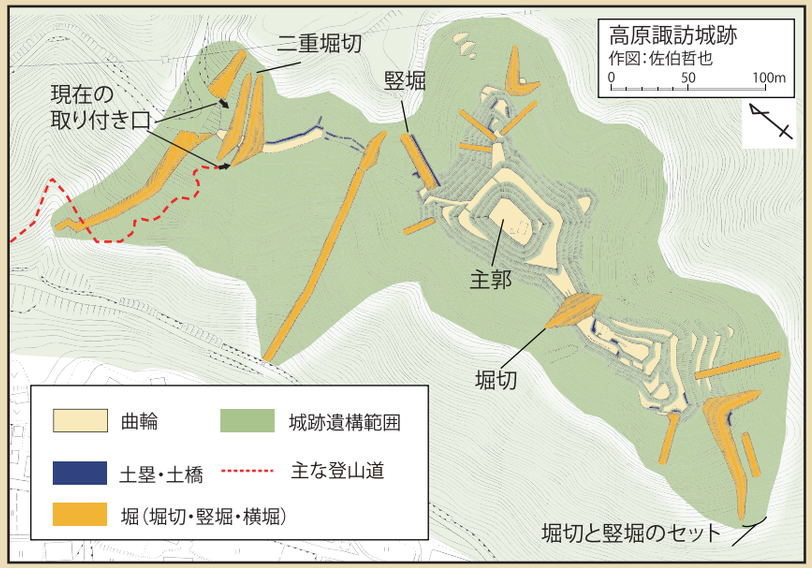
高原諏訪城は、下館跡の背後にある規模の大きな山城です。城の南裾において、山之村道が上宝道から分岐し、山之村で鎌倉（有峰）街道と連絡しています。江馬氏の本拠地である殿段丘を見下ろすとともに、周辺の山城と連絡し、越中方面の峠を監視する立地となっています。その立地や規模から、江馬氏の本城であったと考えられますが、築城年代・築城者ともに不明です。

天正 10 年（1582）の八日町合戦で当主の江馬輝盛が討たれると、高原諏訪城は三木氏方であった、小島城主・小島時光に攻められ落城してしまいます。その後も江馬氏は滅亡せず、活動は認められますが、古川盆地の城跡に見られるような石垣の多用や枡形虎口の利用といった、後の改修の痕跡は認められず、江馬氏が構築した戦国時代の山城の様相が色濃く残っています。

地元で通称「一本松」と呼ばれている山の高台が主郭で、城の中枢区画であったと考えられます。その主郭を取り巻くように帯曲輪が巡っています。また、その北側尾根の延長に巨大な堀切や竪堀を連続して設け、尾根筋からの攻撃に備えています。

主郭の南方にも巨大な堀切を設け、その先にも平坦地があり、さらに尾根の先端にも巨大な堀切と竪堀を設けています。

この城の最大の特徴が、これらの各地区を区切るように構築されている巨大な堀切や長大な竪堀です。大規模な戦国時代の土木工事の跡を今も体感することができる飛騨有数の山城です。





高原諏訪城跡主郭からの眺め



◆高原諏訪城跡へのアクセス

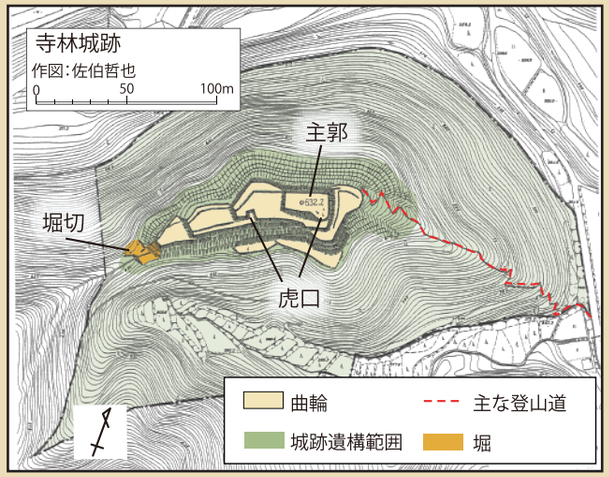
- JR 高山本線「飛騨古川駅」下車。
- 飛騨古川駅より濃飛バス古川・神岡線で「濃飛バス神岡営業所」下車。そこから市営バスひだまる山之村線に乗車し「江馬館前」下車。
- 円城寺裏より山道を登る。もしくは県道 484 号線沿いに登る。城跡まで徒歩約 30 分。

～越中東街道沿いの山城跡～

神岡町中心部から西方向には、寺林城跡・政元城跡という２つの山城が存在します。この２城は古川・荒城方面へ至る越中東街道沿いに位置し、敵対していた姉小路（三木）氏へ押さえの城であったと考えられます。

2. 寺林城跡（国史跡）

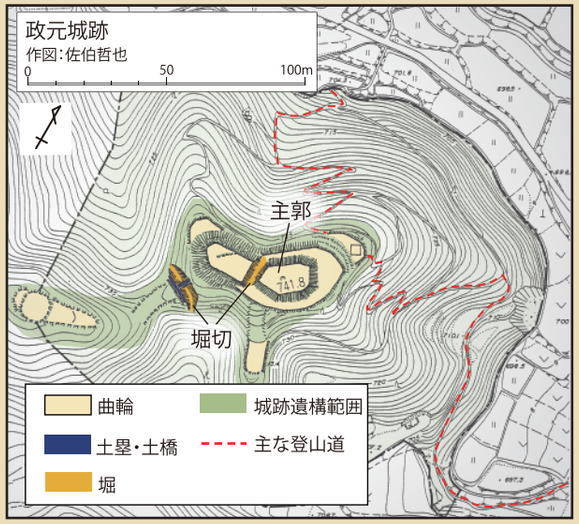
神岡町寺林地区の玄蕃山に存在する山城で、玄蕃城とも称されます。江馬氏の家臣、寺林蔵之介・玄蕃あるいは寺林大蔵の居城と伝わります。山頂の方形の平坦地が主郭で、西に三段の曲輪が連なり、各平坦地は切岸によって遮断されています。その先の尾根上には堀切が設けられており、尾根伝いからの攻めを警戒しています。また、寺林集落側の東側の曲輪には通路状の横堀があり、主郭の東西にそれぞれ虎口が認められるのも特徴です。主郭からは街道を良く見通すことができます。





◆寺林城跡へのアクセス
・JR 高山本線「飛騨古川駅」下車。
・濃飛バス古川・神岡線に乗車し「寺林」下車。城跡まで徒歩約 20 分。

3. 政元城跡（国史跡）



神岡町西地区の大国寺の裏山に存在する山城です。越中東街道はこの地で巣山・大坂峠（十三墓峠）を越える本道と、数河峠を越える脇街道（数河街道）に別れていて、政元城はその分岐点の押さえであったと考えられます。江馬氏の家臣・吉村政元の居城とも、正本主馬の居城とも伝わります。山頂の楕円形の平坦地が主郭で、その周囲を幅 4 ～ 10m の腰曲輪がめぐっています。堀切を挟んで西側にも曲輪があり、その西側の尾根筋にも堀切を設けて尾根伝いからの敵の侵入に備えています。



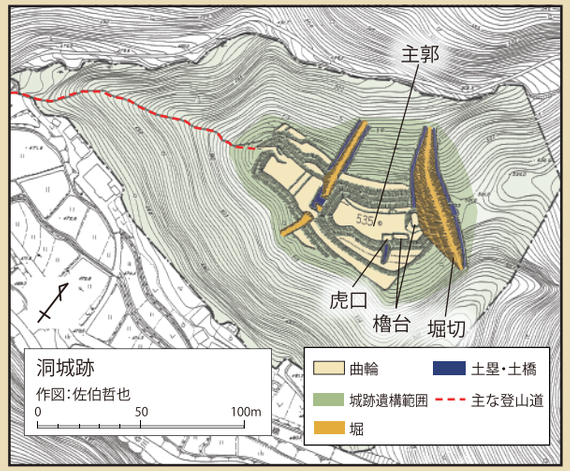
◆政元城跡へのアクセス
・ＪＲ高山本線「飛騨古川駅」下車
・濃飛バス神岡・古川線に乗車し、「流葉口」下車。
・徒歩にて大国寺方向へ向かい、城跡まで徒歩約 20 分。

～上宝道沿いの山城跡～

神岡町の中心部から高原川をさかのぼると、洞城跡・石神城跡という山城跡が存在します。２城とも、高原郷と鎌倉（有峰）街道を結ぶ上宝道沿いに立地しており、上宝（高山市上宝町）を通り、信州方面へと続いています。

4. 洞城跡（国史跡）

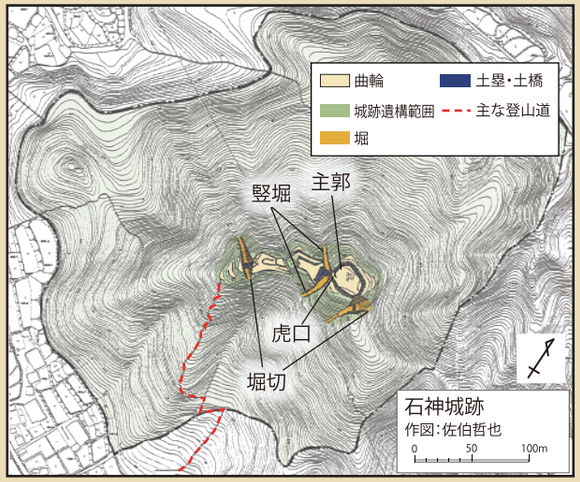
神岡町麻生野地区の城山に存在し、麻生野城とも称されます。『飛州志』では麻生野右衛門大夫 直盛の居城としています。山頂の長方形の平坦地が主郭で、南側には腰曲輪から通行するための土橋が付属する虎口が設けられています。主郭西側にも長方形の副郭があり、土橋・土塁を伴う 両竪堀 によって遮断されています。また、主郭北東側には土塁を伴う堀切が設けられており、その監視のために主郭に櫓台 が設けられています。特にこの堀切の規模は巨大で、本城の高原諏訪城と比較しても遜色ない大きさを誇ります。





◆洞城跡へのアクセス
・JR 高山本線「飛騨古川駅」下車。
・濃飛バス古川・神岡線に乗車し「濃飛バス神岡営業所」下車。
そこから市営バスひだまる神岡東部線に乗車し、「下麻生野」下車。
・東方向に向かい、城跡まで徒歩約 30 分。

5. 石神城跡（国史跡）



神岡町石神地区にある山城で、杏城・二越城とも称されます。江馬時経が築城したと伝わります。上宝道沿いに立地し、石神の集落を見下ろす尾根の突端に築かれています。城域の尾根の前後を堀切で遮断していて、高原諏訪城にも見られる特徴です。山頂の楕円形の平坦地が主郭で、西側に竪堀と虎口、東側は堀切を設けています。主郭の西側に副郭があり、現在は送電鉄塔が建っています。最も集落側に近い西側の堀切には通路用に土橋を設け、城内側には櫓台を構築しています。



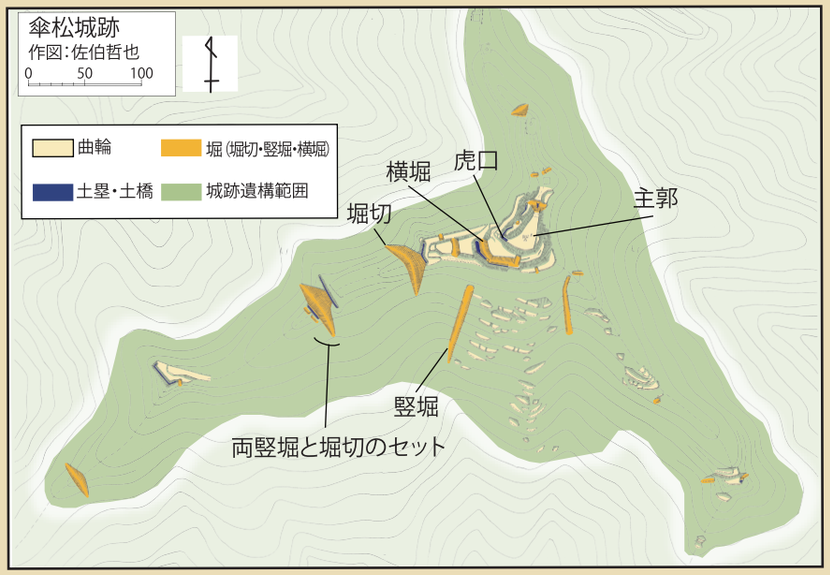
◆石神城跡へのアクセス
・JR 高山本線「飛騨古川駅」下車。
・濃飛バス古川・神岡線　に乗車し「濃飛バス神岡営業所」下車。
そこから市営バスひだまる神岡東部線に乗車し「石神」下車。
・東の白山神社方向へ向かい、城跡まで徒歩約 30 分。

6. 傘松城跡（県史跡）　からかさまつじょうあと

傘松城跡は、下館から正面（東）方向に見える「観音山」の山頂に築かれた山城で、吉田城とも称されます。元々、神岡町内にある薬師堂懸仏の金石文銘により永仁七年（1299）の築城と伝わり、近世以降の地誌等にも江馬氏の城としての記述が見られないことから、以前は江馬氏の関連城館とされていませんでしたが、近年の研究成果によって江馬氏の山城である可能性が非常に高いことが判明しました。

城郭遺構については、良好に残っており、堀切・竪堀といった遺構の規模は、神岡町内の江馬氏関連の山城の中では高原諏訪城に次ぐものです。そうした堀切・切岸といった大規模な防御施設を、古川方面の尾根に幾重にも構築し、領地外からの敵の侵入に備えています。そして、主郭の周囲には横堀や虎口といった高度な遺構を巡らして厳重に警戒しています。このような遺構の様子から、江馬氏が滅びる天正年間ごろまで使用されていたと推定されます。

立地的にも、江馬氏にとって非常に重要な場所に存在します。傘松城の主郭からは高原諏訪城や下館を手に取るように視認できます。また、高原諏訪城からは見えない洞城・石神城も見通すことができます。そのため、高原郷を治るには必要不可欠な拠点であったと考えられます。また、古川盆地から高原郷へ至る複数の峠道（数河峠・杉越峠）を監視することも可能で、軍事拠点としても非常に重要な城であったと考えられます。





傘松城跡全景（高原諏訪城跡上空より）



◆傘松城跡へのアクセス
・JR高山本線「飛騨古川駅」下車。
・濃飛バス古川・神岡線　に乗車し、「濃飛バス神岡営業所」下車。
・そこから濃飛バス吉田線に乗車し、「阿弥陀堂前」下車。城跡まで徒歩約1時間。
・もしくは同線にて常蓮寺近辺で下車
（バス停は無く、自分の下車したい場所を運転手に伝える）。城跡まで約1時間。
※他にも登山道があります。

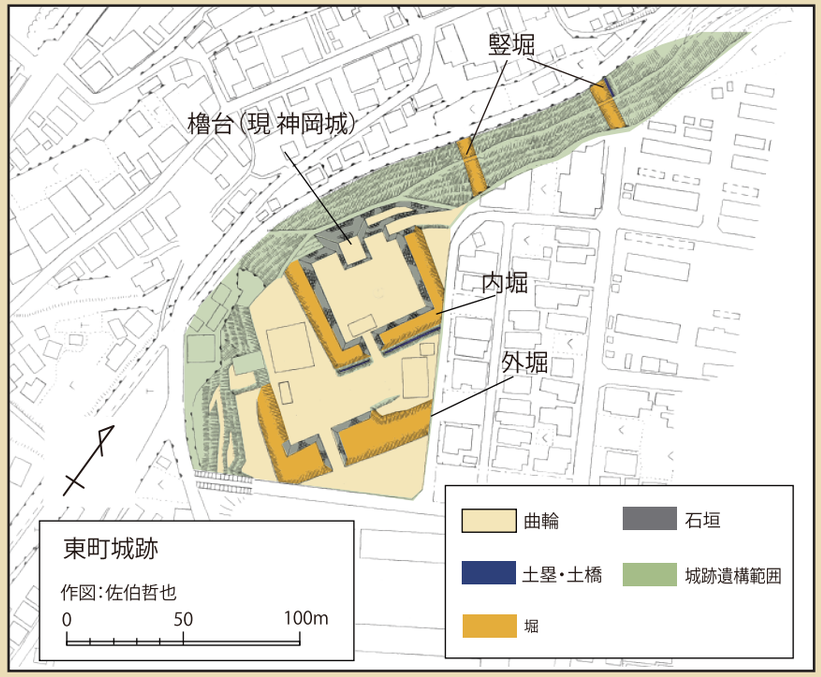
7. 東町城跡（市史跡）　ひがしまちじょうあと

東町城跡は神岡町東町に存在し、野尻城・沖野城・江馬之御館とも伝わります。飛騨市内で唯一の平山城です。神岡の市街地である船津を見下ろす段丘の縁に位置し、付近で越中東街道と上宝道が合流する交通の要衝です。伝承では、永禄７年（1564）ごろに甲斐の武田勢が飛騨に侵攻した際に江馬氏に命じて築かせ、後に金森氏が改修したとされますが、詳細は不明です。ただし、下館が発掘調査によって 16 世紀前半に廃絶したことが判明しています。そのため、下館廃絶後の本拠の移転先として有力な場所です。

現状は主要部には資料館（高原郷土館）が建ち、一部が宅地となっています。現在の天守（神岡城）は、昭和 45 年（1970）に三井金属鉱業株式会社が神岡鉱業所の創業 100 年を記念して建てられた模擬天守で、石垣もその際に積み直されたものです。

しかし、整備前の図面や古写真を見ると、曲輪の形などは整備前と基本的に変わっていないことが分かります。現在天守がある場所も石垣で固められており、石垣を基底とする重層櫓が建っていた可能性があります。江馬氏の城に見られない石垣の多用から、伝承どおり金森氏の改修が考えられます。

また、段丘に面してこの櫓台を構築していることから、下段の町場から見える象徴的な役割を果たしていたと考えられます。現在の天守からは、当時と同じ位置・視点で町や街道を眺めることができます。




東町城跡（現：高原郷土館）



◆東町城跡(高原郷土館)へのアクセス
・ＪＲ高山本線「飛騨古川駅」下車。
・ＪＲ飛騨古川駅より濃飛バス古川・神岡線に乗車し、「濃飛バス神岡営業所」下車。
そこから市営バスひだまる神岡東部線等に乗車し、「スカイドーム神岡」下車。
・高原郷土館へ向かい、城跡まで徒歩約10分。